

第 15 冊

『織田信長のマネー革命』 ～経済戦争としての戦国時代～ 武田知弘、ソフトバンク新書、2011年 第1回

なぜ信長は強かったのか

第14冊の紹介から随分時間がたってしまいました。コロナ禍のため、ZOOM授業のパワーポイント資料を作成したり、動画を作成してClassiにアップしたりするのに追われてしまいました。また、夏休みや冬休みが短くなり、本来なら読んだ本をまとめていく時間が削られてしまいました。

と言いつつ、閑話休題。あなたは「戦国大名で最も好きな人物は誰？」と聞かれて、誰を思い浮かべますか？

上杉謙信ですか？武田信玄でしょうか？それとも伊達政宗、真田幸村でしょうか？

質問を、ちょっと変えてみます。

あなたは、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の3人の中で、誰が一番好きですか？

私は、何といっても織田信長です。

なぜ、信長なのか？

やはり、他の戦国大名の誰もできなかったことを、次々と実行に移していった強い指導力・実行力にあこがれます。楽市楽座にしても関所の撤廃にしても、信長が最初にしたわけではないですが、徹底させていったのは信長でした。類い希な合理的な精神もあげられると思います。比叡山延暦寺を焼き打ちしたことで、信長を偏狂的に扱うひとがいますが、それは誤解です。

たしかに、信長に関しては、様々な疑問があります。たとえば、

なぜ、信長の旗印は「永楽通宝」なのでしょう？全然強そうじゃないでしょう？「毘」とか「龍」や「百足」の絵などもないですし、「風林火山」とか「厭離穢土」「欣求浄土」などの哲学的な雰囲気もないです。現在だったら、戦場に「福沢諭吉」(1万円札)と書いた旗をなびかせているみたいなもんじゃないですか？

あるいは、**どうして信長は足利義昭を京に連れて行き將軍職につけられたのか？**他の大名の誰もできなかったのに。

なぜ、比叡山延暦寺を焼き打ちしたのでしょうか？他の大名たちは延暦寺との争いを極力避けてきたのに。

なぜ、長篠の戦いで3000丁とも言われる鉄砲を用意できたのでしょうか？鉄砲は国内で生産できますが、弾を飛ばすには硝石が必要で、それは外国から手に入れる必要があります。**どうやって鉄砲を買い集めたり硝石を手に入れたりしたのでしょうか？莫大なお金が必要だと思いますが、その資金源は何かなのでしょう？**

というように、疑問がいっぱい湧いてきます。

そこで、今回は織田信長を取り上げます。読んでいく本は**武田知弘氏の『織田信長のマネー革命～経済戦争としての戦国時代～』**です。NHKの「大河ドラマ」で、ほとんど取り上げられないことがない織田信長の一面、考えや裏の部分を明かしてくれます。そして、上記の疑問を解き明かしてくれますよ。

さて、著者の**武田知弘（たけだ ともひろ、1967年～）**氏は福岡県出身、西南学院大学経済学部を中退。1991年にノンキャリア職員として大蔵省に入省し、バブル崩壊前後の日本経済の現場をつぶさに見て回りました。1998年から執筆活動を開始され、1999年に大蔵省を退官し、出版社勤務などを経て、フリーライターとなりました。

また、著書はたくさんありますが、一部を紹介しておきます。

『ナチスの発明』彩図社、2006

『戦前の日本 教科書には載っていない！』彩図社、2009

『戦前の生活 大日本帝国の"リアルな生活誌"』ちくま文庫

『ヒトラーの経済政策 世界恐慌からの奇跡的な復興』祥伝社新書、2009

『ヒトラーとケインズ いかに大恐慌を克服するか』祥伝社新書、2010

『織田信長のマネー革命 経済戦争としての戦国時代』ソフトバンク新書、2011

『教科書には載っていない大日本帝国の真実』彩図社、2011

『ワケありな日本経済 消費税が活力を奪う本当の理由 官庁データから読み解く』ビジネス社、2011

『生活保護の謎』祥伝社新書、2012

『税金は金持ちから取れ 富裕税を導入すれば、消費税はいらない』金曜日、2012

『史上最大の経済改革"明治維新"』イースト・プレス、2013

- 『大日本帝国の国家戦略 日本はなぜ短期間でアジア最強になったのか?』 彩図社、2013
- 『「桶狭間」は経済戦争だった 戦国史の謎は「経済」で解ける』 青春新書INTELLIGENCE 2014
- 『「新富裕層」が日本を滅ぼす 金持ちが普通に納税すれば、消費税はいらない!』 森永卓郎監修 中公新書ラクレ 2014
- 『教科書には載っていない太平洋戦争の大誤解』 彩図社 2015
- 『教科書には載っていない大日本帝国の発明 世界を驚かせた33の発明秘話』 彩図社 2015
- 『大日本帝国の経済戦略』 祥伝社新書 2015



織田家の経済力

そもそも織田家とは

信長と言えば、れっきとした「戦国大名」ですね。戦国大名と言えば、下記のように、その出自が大きく分けて3種類に分かれます。

- 1つめは、「**守護大名**」から**戦国大名**になった一族
- 2つめは、「**守護代**」から**戦国大名**になった一族
- 3つめは、「**国人**」から**成り上がった**一族

では、下記の①～③の戦国大名は、上記のどれに該当するのでしょうか？

- ①**武田氏・島津氏・今川氏** ②**上杉氏（長尾氏）・朝倉氏** ③**毛利氏・伊達氏・長宗我部氏**

1つめの「守護大名」から戦国大名になったのが、①です。2つめの「守護代」から戦国大名になったのが、②です。3つめの「国人」から成り上がったのが、③です。

では、織田氏はどうだったのでしょうか？

織田信長の家は、もともと大名家ではありませんでした。信長の生まれた織田「弾正忠（だんじょうのちゅう）家」は、尾張国の下四郡の守護代であった織田「大和守家（清洲織田家）」の家臣にして分家筋であり、「清洲三奉行」という家柄でした。守護大名の斯波氏に仕える守護代織田氏の分家ということなので、管理職程度だったということになりますね。

当時、尾張国では、守護である斯波氏の力はすでに衰えており、守護代の織田氏も分裂していました。こうした状況下で、信長の父である信秀は、守護代・織田達勝らの支援を得て、今川氏豊から那古野城を奪うことに成功します。そして、信秀は尾張国内において勢力を急拡大させていったのです。

従って、信長は織田「弾正忠家」の当主である織田信秀の子として生まれ、尾張の一地方領主としてその生涯を歩み始め、織田弾正忠家の家督を継いだ後、尾張守護代の織田大和守家、織田伊勢守家を滅ぼし、さらに弟の織田信行を排除して、尾張一国の支配を徐々に固めていったのでした。

経済力の源は津島湊

ですから、「うつけ」と呼ばれた信長が一代で大きな勢力を築きあげたのではありません。

では、誰が勢力を大きくしていったのでしょうか？

それは、**信長の祖父・織田信定**のときから始まります。きっかけは**津島**（現愛知県西部）を獲得したことでした。現在の津島は陸地になっていて、昔の面影はないそうですが、かつては伊勢湾交易の玄関口として水運で繁栄する大流通都市だったのです。

津島は、尾張と伊勢を結ぶ中間地点にあり、ちょうど西日本と東日本の中間に位置しています。木曽川の支流と天王川の合流点でもありました。

さらに、津島神社は主に東国を中心に広がる牛頭天王（ごずてんのう）信仰の中心地でもありました。そのため、多くの信者が参拝に訪れ、またそれに伴う宗教上の利権によって富で潤う信仰都市でもあったのです。

ちなみに、私が生まれたのは現在愛媛県宇和島市となっていますが、もともと津島町という町があり、そこで生まれました。津島町には津島神社ではなく、「三島神社」があります。信長との関係はあったのでしょうか？信長ファンの私としては気になるところです（笑）。

津島を獲得した織田信定はここに本拠となる居城を移し、津島の商人たちを保護し、権益を守りながら徐々に織田家の被官（部下）化して、貿易都市を掌握していったようです。だいたい大永年間（1521～28）の頃とみられます。

また**信長の父である信秀**の代には、新たに**熱田**（愛知県名古屋市）の地も獲得しました。熱田もまた、陸路では鎌倉と京都を結ぶ交通の要路であり、港町としては伊勢湾流通で繁栄を極めていました。

ここには熱田神宮がありますよね。熱田神宮と言えば、**三種の神器**の1つである「**草薙剣（くさなぎのつるぎ）**」がご神体となっています。もともとは伊勢湾に突出した岬上に位置していましたが、周辺の干拓が進んでしまったので、現在はその面影は見られないそうです。

いずれにしても、人や物が多く集まってきますから、信長の祖父や父の二代にわたって築かれた2つの貿易・宗教都市の経営によって得られる巨万の富を源泉として、織田家の経済力が大きくなっていくのです。

つまり、織田家とは土地ではなく、いち早く銭（マネー）を収益の中心に据えた一族だったといえます。お金の効用を熟知し、「経済力」を効率的に駆使し、「経済戦略」というお金をメインにした戦略を展開したことこそ、織田家が急成長を遂げた強さの秘訣だったのですね。

織田家は金の使い方がうまい

ここで、歴史学者 [三石晃生さんのWEB記事「知られざる、偉人とお金のはなし 第一回 織田信長」](#)に興味を惹かれる記事がありましたので、紹介します。

信長の父・織田信秀は、お金の効用をよく熟知していました。普通の人ならば、何か欲しいものを購入したり、美味しいものを食べたりする（消費）か、または株式や不動産などに投資する（利殖）か、の2つしか思いつかないと思います。

ところが、信長の父・信秀は津島と熱田という2つの大商業都市経営からもたらされる莫大な財力を使って第3の選択肢である「寄付」をしていくのです。彼が行なった大きな寄進を見てみると、

天文十年（1541）	伊勢外宮に銭700貫文と材木を献上
天文十二年（1543）	「内裏築地修理料」として4000貫文を朝廷に献上 (『多聞院日記』による)
天文十六年（1547）	5年前の天文法華の乱で消失した京都・建仁寺の塔頭寺院を再建

と、大型の寄付を短期間のうちに行なっています。

詳細を[三石晃生さんのWEB記事「知られざる、偉人とお金のはなし 第一回 織田信長」](#)でみてみましょう。紹介が少々長くなりますが、許してくださいね。

まず一番目の伊勢神宮の寄付は・・・20年に一度新しく社殿を造営する「式年遷宮」である。15世紀後半以降になると神宮の経済状態は大きく傾き、さらにそれを援助する朝廷や室町幕府も衰退して遷宮費用が捻出できなくなった。その結果、外宮は永享6年（1434）年以降、内宮は寛正3年（1462）以降、式年遷宮の伝統が途絶してしまうのである。

途絶から約100年後、内宮の遷宮（略式ではあるが）のパトロンの目処がついた。しかし朝廷と幕府は慣例に従って外宮の遷宮を先にせねば内宮の遷宮はできないという判断を下す。そうするとまず外宮が遷宮されなくてはならない。そこで外宮の禰宜（神職）が費用提供してくれそうな「羽振りのいい大名」を探し回って行き着いた先が、この織田信秀であった（信秀は大名ではないのだが）。信長の父、信秀はこの遷宮の費用と材木の負担を快諾する。

この伊勢外宮の遷宮造替費を寄進したことで、朝廷と室町将軍の間で俄かに「織田弾正忠家」という今まで聞いたことのない無名の分家筋の名が知られるきっかけとなった。織田とは何者だ。家

柄こそ高くないが、尾張の織田の分家筋には頼れる男がいるらしい、と。

その翌年、今度は朝廷から、破損した内裏（皇居）の修繕を持ちかけられる。そんなものぐらい自分で直せばいいと思うが、後に述べるように天皇は極貧生活を送っていたし、室町幕府にもそんな財源などどこにもなかった。しかしそんな落ち目の朝廷に信秀は救いの手を差し伸べる。この朝廷からの申し出にも快諾し、修繕費として4000貫文をポンと献上してみせたのである。

ちなみにこの4000貫文の金額がどれほどのものかという、後世にはなるが西国五カ国を領した毛利元就と比較してみる。毛利元就が正親町天皇の即位礼の費用として朝廷に贈った金額が2000貫文。1000貫文は現代の金額に換算すると1億円から1億5000万円程度に相当する。すると信秀が内裏修復に投じた金額は4億から6億にも上る巨額であった。

毛利元就は西国五カ国の大大名。織田信秀は尾張国で最も有力な人物ではあったが尾張の一部地域の領主にすぎない。身分的にも分家筋に仕える奉行に過ぎず、毛利家とは領土も格も天と地ほどの差である。それにも関わらず4000貫文の寄進を行うことができる織田家の財力の大きさがどれほどのものかわかるだろう。

当時、多くの大名たちは、もはや落ち目の朝廷や幕府を助ける金を無駄金と思って惜しんだが信長の父・信秀は巨額の富をパブリックなものへ次々とドネーションすることを決断していく。このことが織田家にとって大きな意味をもつことになる。

信秀死後、朝廷は何度か信長に肩入れをするのだが、これこそが父・信秀が外宮・朝廷などのパブリックに莫大な資産を投じたことによって形成された「織田ブランド」の力なのであった。

……。かつてはこの即位礼を行いたくても挙行できなかった天皇たちがいたのである。室町時代末期の応仁の乱以後、天皇や貴族の領地が武士たちに奪われて財源が確保できなくなり、天皇や貴族たちは非常に貧しい生活を余儀なくされていた。奪われた土地を取り戻したいと思っても実行する法的強制力も実行力もないのだから、失われていく土地や財源をただ指をくわえて見ているしかなかった。

当時の天皇家の貧困さは現代の我々の想像をはるかに超えている。後土御門天皇（在位：1464～1500）は59歳で崩御するが、葬儀費用がないために遺体が43日も御所の仏間に置かれたままになり、まだ晩夏の頃であったから腐乱してしまうという有様だった。次の後柏原天皇（在位：1500～1526）は後土御門天皇のあと皇位継承したものの、即位式の費用が用意できず、26年間の在位期間のうち、21年目の58歳にしてようやく即位式を行うことができた。

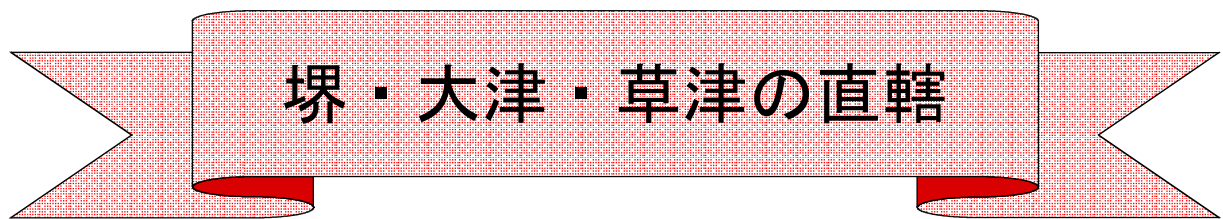
その後柏原天皇の崩御を受けて即位した後奈良天皇（在位：1526～1557）も多分に漏れず、財政難で在位10年目でなんとか即位式が執り行われる。先の信秀に内裏の修復を依頼したのが後奈良天皇である。天皇であったが貧乏これ極まり、自ら色紙に書を書いてはそれを人に売ったり、朝廷の位を官人以外に販売するほどの窮状ぶりであった。こうした朝廷の状態であったから、巨額の寄付を行う織田家の存在はまさに救世主であった。

下線部については、現在NHKで放映されている「大河ドラマ」の『麒麟がくる』のなかでも放映されていましたね。信長が入京して、将軍（幕府）よりも天皇（朝廷）を重視するのを明智光秀がいぶかるシーンがありました。信長は父の信秀が内裏の塀を修理したと、誇らしげに話していたのが印象的でした。

なお、『麒麟がくる』で登場しているのが**正親町（おおぎまち）天皇**で、その父親が上記の下線部の後奈良天皇です。ちなみに、後奈良天皇の名前は不思議です。なぜかと言えば、「**後奈良**」**天皇はいませんが、「奈良**」**天皇はいない**からです。

ということかということ、醍醐天皇に対して後醍醐天皇、朱雀天皇に対して後朱雀天皇、三条天皇に対して後三条天皇、白河天皇に対して後白河天皇・・・のように、「後」がつく天皇は、「先代」の天皇がいるはずなんです。でも、後奈良天皇に対して奈良天皇はいない。どういことでしょうか？

でも、「平城」天皇はいます。なので、「平城」天皇の読みは「なら」天皇ではないかという学者がいます。「なら」天皇に対して「ごなら」天皇ならば、つじつまが合いますよね。



群雄が割拠する戦国時代で、「**天下布武**」をとなえ、いち早く京都に旗を立てたのは織田信長です。「天下布武」という言葉は、「武力を持って天下を統一する」という意味で捉えられますよね。でも、当時は、「武力による争いを収めて、平和な世の中を構築する」という意味で捉えられていたといえます。

なぜ、信長が、他の戦国大名たちに先んじることができたのでしょうか？

信長は軍力によって周辺の戦国大名をなぎ倒し、領土を広げていきました。なぜ、それができたのか？信長が強力な軍力を持っていたのは、「**経済戦略のたまもの**」だと言って良いのです。

例えば信長は「兵農分離」（まだ、豊臣秀吉ほど徹底させていませんが）や「鉄砲の大量使用」で敵の戦国大名たちを倒してきましたが、どちらにも多額の費用がかかりますよね。

だって、「兵農分離」というのは、一年中働ける常備兵を整えるシステムです。常備兵の方が、農閑期に農民を集めてつくる軍隊よりも、断然強くなります。でも、常備兵を持つには、それを雇用しなければならないので、莫大な経費がかかります。

また、鉄砲という当時の新兵器を大量に持っている方が、戦さに強くなるのは当然ですよね。でも、鉄砲を大量に用意するには、莫大な経費が必要になります。

他の戦国大名にはそれができず、信長にはできたということは、信長はそれだけ経済力を持っていたことになります。つまり、**信長は軍力と言うより、「経済力」「経済戦略」で周囲の戦国大名たちを圧倒してきた**といえます。



港＝金となる木

よく知られているように、信長は足利義昭を擁して上洛して京都を押さえたとき、義昭から副将軍や管領職などの高い官職を与えるといわれましたが、これを断って、その代わりに、「堺」「大津」「草津」を所望しました。

信長は領地よりも「港」を欲しがった、ということですね。それにしても、なぜ、港なんですか？港を入手したら、どんな利益が得られるのでしょうか？

先ほどの「堺」ですが、堺は当時、**日本で最大の国際港**です。宣教師フランシスコ・ザビエルが堺を訪れたとき、「日本国内の殆どの富が集積している地」とであると書き記しています。

大津は琵琶湖の最南にあり、琵琶湖水路ルートの**京都側の玄関口**にあたります。当時、京都から東北日本に行く場合、琵琶湖を船で上るのが一般的でしたから、大津は人や物が最も多く集まる港でした。

また、草津には**中山道と東海道の分岐点**があり、これもまた交通の要衝です。これらの交通拠点を押さえられれば、莫大な富が入ってきます。信長はそれを狙ったのでした。

信長は、なぜ港を欲したのでしょうか？

その答えを端的に言えば、**莫大な関税収入が手に入る**、ということです。当時の港では、関税（通行税）を課するのが普通でした。そして、大きな港には多くの船が出入りしますから、その関税収入だけで莫大なものになります。

戦国以前、日本有数の港だった兵庫港には、北関と南関という2つの税関がありました。そのうち、北関の税関台帳（**「兵庫北関入船納帳」**）が残っています。南関は興福寺が、北関は東大寺が管轄してい

ました。

これについては、[山川出版社の教科書](#)でも詳しく書いています。教科書によると、1445年の1年間に瀬戸内海各地の港から兵庫湊に出入りした船の総数は2700隻以上に上ったそうです。ということは、毎日7～8隻の船が入港していることになります。

そして、これがポイントですが、この税関台帳によると、**積み荷の1%が関税として徴収されていた**といひます。1%の税を取ったとして、いったいいくらになるのでしょうか？具体的な数字がわかっていないのが残念です。

ちなみに、越後の**上杉謙信**の場合、柏崎と直江津の2つの港から入る「船道前（ふなどうまえ）」という関税収入が、年間4万貫文に及んだといひます。4万貫文というと、だいたい10万石の大名の年貢収入に匹敵するといひます（年貢率4割と仮定して）。

つまり、上杉謙信は実際の領地に加え、10万石分の領地を持っていたのと同じなんです。この収入を現在の価値で考えると、年間60億円にもなるそうです。

したがって、信長も、祖父や父と同じように、津島湊や熱田湊の商人たちから金を徴収していたはずです。港を押さえれば莫大な収益が上がることを、信長は生まれながらにして学んでいたのです。

しかも、信長が入手した堺・大津・草津の港は、上杉謙信の柏崎・直江津よりもはるかに物流が多かったはずです。同じように1%の関税を取るならば、それは相当の税金になったのは間違いがありません。信長はそうして得たお金を活かすことで、次々とライバルをなぎ倒していくことになります。

信長の「経済力」の強さの源は「港」だったと言えますね。

港で「経済封鎖」

港を押さえることで「関税収入を確保し」「収益を上げる」だけではありません。それ以外にも、実は「経済封鎖」が可能になる、という戦略的価値（メリット）もあります。

この点に関して**大村大次郎氏**が『[お金の流れで読む日本の歴史](#)』（[角川書店、2016年](#)）を書いておられます。この本から**「経済封鎖で鉄砲を使わせない」**という記述がありますので、紹介します。



信長が、堺、草津、大津を直轄にした・・・が、これは明らかに東国への経済封鎖を念頭に置いてのことである。

堺、草津、大津の港はもちろん収益も大きい。だから、その点ばかりがクローズアップされてしまうのだが、この3港は、収益を上げること以上に戦略的価値があったのだ。

堺、草津、大津を押さえた信長は、敵国に対して当然のように軍需物資の差し止めを行っている。

たとえば、天正5年（1577）、上杉謙信と交戦していた信長は、若狭湾を航行する廻船などに対して、謙信領への米の搬入を禁止している。また柴田勝家も三国港の問丸（流通の元締め）の森田氏に、越後、越中、能登の3カ国に入船する船を止めさせている。

信長が武田方に対して行った「荷留」の具体的な記録はあまり残っていないが、様々な形で経済封鎖をしていたことは間違いないだろう。

武田方が鉄砲や鉄の入手に苦労した様子は、いろいろな形で残されている。

たとえば、長篠の戦いの少し前頃、武田信玄の甥の穴山梅雪が配下の商人にこういう命令を下している。

「敵方の手下のような振りをして敵の商人と取引せよ。うまく鉄や鉄砲を購入できれば、輸送のための馬は二〇〇頭でも三〇〇頭でも用意する」

武田方が鉄や鉄砲の不足を、なんとしても解消しようという様子が見て取れるエピソードだ。穴山梅雪は武田軍の重要武将の一人で、駿河国の江尻を領有していた（のちにこの穴山梅雪は金2000枚を持って信長に帰順している）。

それでも鉄砲はすでに国産化しており、重要港を押さえられも入手する術はあった。だが、鉄砲を用いるには、弾薬の原料として硝石が必要になる。この硝石はまだ国産化しておらず（国産化されるのは1580年代ぐらい）、殆ど中国や南蛮からの輸入に頼っていた。

つまり、海外貿易ルートを持たず硝石を手に入れない戦国大名は、たとえ鉄砲自体を持っていたとしても、鉄砲を大々的に使用することはできなかったのだ。

海外貿易の港は日本にいくつかあったが、最東に位置しているのが「堺」だった。堺より東には、海外貿易船は入ってこない。つまり、堺を押さえられれば、それ以东の大名には弾薬の原料となる硝石が入らなくなるということなのだ。

信長が上洛して以来、東国の有力大名、武田や上杉などは、硝石の入手に非常に苦労したはずである。

うーん、「恐るべし信長」と思わず唸ってしまいます。

そう言えば**日露戦争**の際に、日本はイギリスと**日英同盟**を結びました。ロシアの**バルチック艦隊**が日本海に向かう途中、アフリカやインドなどで石炭や食糧の補給をしなければなりません。ところが、ロシアがイギリス支配下の港を利用しようとする、それらの物資を提供しなかったり、提供するのをサボタージュしました。そんなイギリスの「サポート」があったから、日本の**連合艦隊**がバルチック艦隊を壊滅させることに成功したとも言えます。イギリス支配下の港でロシアに対する「経済封鎖」が、バルチック艦隊にはボディブローのように効いたのでしょう。



織田信長像

ところで、WEBで面白い記事を見つけましたので、紹介します。**中里幸聖（大和総研金融調査部主任研究員）**さんがまとめておられる『**信長はなぜ本拠を次々移したのか？「転都」は経済再生の切り札になる**』という記事です。

信長が足利義昭を奉じて上洛した際、義昭から副将軍の地位を打診されたが断り、国際的貿易拠点である堺を望んだことに象徴されるように、信長は商業貿易拠点を押さえることを志向していた。そもそも尾張時代に東海地方の商業貿易拠点の津島を押さえていたことが、信長の経済力の基礎の一つとなっている。また、伊勢、若狹、越前などの攻略も商業貿易拠点を押さえることが目的の一つであったと考えられる。これらの拠点を琵琶湖を核としてネットワーク化すると日本海側と太平洋側を結ぶ一大交易網が現出することとなる。堺も含めれば、瀬戸内海にも通ずる。

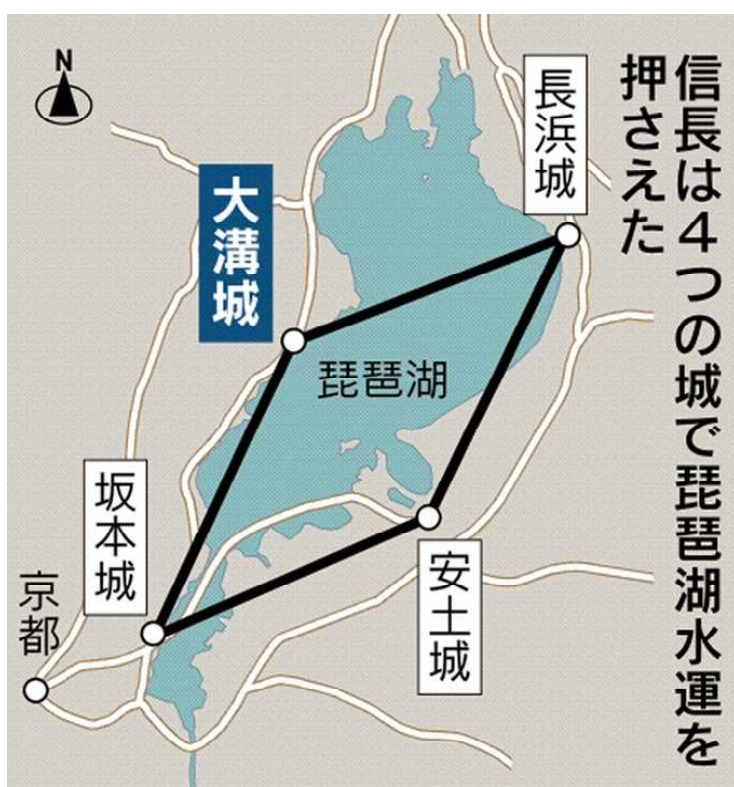
琵琶湖については、晩年の信長の拠点となる安土城、長浜城（初代城主は豊臣秀吉）、坂本城（同、明智光秀）、大溝城（同、津田信澄。信長の甥）が琵琶湖湖畔にダイヤモンド状に配置されており、これらの城間のネットワークが軍事的に天下布武に貢献している。さらに、琵琶湖の城間ネットワークが中核となり、前述の一大交易網が治安的にも安定化することで、経済的にも天下布武に貢献したと言えよう。

こうした商業拠点、貿易拠点を重視し、それらをネットワーク化することは、人口減少下でも社会経済活力の持続性を高めることが課題である現代日本にも示唆を与える。国土交通省「国土のグランドデザイン2050」（平成26年7月）の基本コンセプトである「コンパクト＋ネットワーク」は、拠点となる都市に行政、商業、住居などの様々な機能をコンパクトに集約したコンパクトシティの構築と、それらをネットワーク化するという国土構造を目指すものである（ネットワークの物理的な基盤は新幹線網と高

速道路網が想定されている)。上手く活用すれば日本経済の活力を取り戻す基盤となると考えられる。信長が中日本地域に琵琶湖を中心に築いたネットワークを全国規模にしたものと見れば、安土桃山時代の繁栄を再現することも期待できるとは言い過ぎだろうか。

注目したいのは、下線部分です。下の地図にあるように、**琵琶湖ネットワーク**ともいうべき4つの城郭を拠点とした水運が信長の手で作られていったのです。

誰もなし得なかったことを信長が実行していったその強さ・たくましさを支えているのが「港」やそれを中核とする「水運」だと言うことがよくわかりますね。



※日本経済新聞のWEB記事「琵琶湖押さえた信長の夢 大溝城跡」より引用

本拠地の移転

織田家並びに信長は、まずもって重要な港を支配下に置いたことで、経済力を大きくしていったこと。さらに、経済力を朝廷・寺社などに有効に使って権威もあげていったことを見てきました。

そして、その経済力を本拠地の移転（城の建築・移転）にも有効に使っていきました。そのあたりのことを、**武田知弘氏の『織田信長のマネー革命～経済戦争としての戦国時代～』**でみていきましょう。

信長が他の戦国武将と大きく違っている部分に、「居城」がある。信長は、生涯の中で4回も居城を替えている。那古野城に始まり、清洲城、小牧山城、岐阜城、安土城である。しかも、本能寺の変の時には大坂にも築城中であり、これが完成すれば大坂を居城にした可能性もある。

他の有力な戦国大名で、これほど居城を替えたものはいない。武田信玄、上杉謙信、毛利元就なども生涯で1つの城に居続けた。**なぜ、信長はこれほど居城を替えたのか？**

よく言われていることは、信長は全国制覇を目指していたので、その都度その都度で、最も戦略的な価値が高い場所に移動していった、ということである。・・・。

しかし、城を移るには巨額な費用がかかる。しかも、**信長の場合、城を移すたびに、それまでの城の常識を覆すようなスケールの城を作っているのだ。**・・・・・・・・・・

信長は、自分だけではなく、配下の武将にも非常に良く城を作らせている。明智光秀の坂本城、羽柴秀吉の長浜城、柴田勝家の北の庄城などである。「築城」の多さは、織田政権の特徴ともいえる。

そして信長は、築城とともに大がかりな城下町建設も行っている。安土や岐阜などは、信長の備によって巨大都市となった。・・・・・・・・・・

確かに、信長は本拠地をどんどん移していつています。尾張国から京都までの間にいくつもの居城を造ったわけですが、戦略的な観点から居城を移した、というわけではないということです。しかも、新しい城を造るたびに、前よりも大きく、立派・豪華なものに成長していつています。当然、金がかかって仕方がなかったことでしょう。それでも、造り続けたのには理由があるのです。



※安土城郭資料館並びに資料館に設置されている安土城の断面模型



信長はなぜ城を作るごとに富貴になっていったのか？まず考えられることは新しい城が「無言の税務署」となっていたのではないか、ということである。

戦国時代というのは、実は税の取り立てが非常に難しい時代だった。戦国大名たちが治めていた領地というのは、ほとんどが公的に認められたものではなく、武力で勝ち取ったものである。そこに正式な「統治権」などはない。

その地域の大名が倒れれば、「統治権」が自動的に倒した方の大名に引き継がれるわけではなく、当地の空白が生じるだけである。だから「尾張一國を平らげた」・・・と言っても、すぐさま新しい領地の租税が信長に入ってくるわけではなかった。

戦国時代は、領地などの権利関係が非常にあいまいだった。もともと荘園だったものが、武家にとられたり寺社にとられたりすることは日常茶飯事だった。領主同士の境界付近にいる農民は、両方の領主に二重に年貢を納めている場合もあった。所有者が明確になっている場合でも、代官の力が強い場合は、代官が年貢のほとんどを持って行くこともあった。・・・・・・

信長が矢継ぎ早に領土拡張戦争を起こせたと言うことは、新領土の統治を素早く軌道に乗せたと言うことである。

信長は、新しく獲得した領地にすぐさま城を建設してきた。尾張を平定した直後に清洲城に居城を移し、美濃を攻略した直後に岐阜城を建てているし、近江を平定した直後に安土城を建てている。信長は、常に「旧敵地」に新しい居城を築いてきたのだ。

これは、信長がその地域の新しい支配者であるかを認識させ、徴税をスムーズにするためのものだったのではないかと。新しく、巨大な城ができれば、領民は誰でも「支配者が替わった」ということを思い知る。

またその城は「その地域の治安を守る」という意思表示でもあっただろう。城が立派であれば立派であるほど、領民は安心するのだ。そして領民にとっては誰に年貢を納めればいいかが、明確になるというわけだ。

つまり信長の城は、敵に対しての牽制でもあり、領民に対しての威圧と安心を与えるものでもあったのである。それは、当然租税収入に反映される。言ってみれば安土城は、「巨大な税務署」だったのである。

うーん、なるほど、そういうことですか。那古野城→清洲城→小牧山城→岐阜城→安土城（→大坂城）と、居城を変え、しかもどんどん巨大な城郭建築を造成していった理由は何か？その答えは、

1つめは、他の戦国大名たちに対する威嚇や牽制のための居城。

2つめは、その周辺に生活する領民たちに対して、誰が支配者なのかを示し、誰に税を納めたらいいのかを明示するのが城なんですね。「うちのお殿様はこんなでっかい城を造れる偉大な人なんだぞ」と、領民は安心して仕事に専念できるようになりますね。

でも、もうひとつあると思います。信長が拠点を那古野から安土と拠点を換え、そして安土の次は後に秀吉が城を構えた大坂に拠点を移していただろうと考えられています。拠点の移動は軍事的な要請もありますが、今の**「公共投資」「公共事業」の効果**もありました。

拠点を移すたびに築城や城改築、城下町の整備が行われ、前述の道路整備と相まって、常に土木・建築業がフル稼働せざるをえません。腕に覚えのある職人は、どんどん信長の城下町に集まってきたのではないのでしょうか。

現代でも、「災害復興」や「東京オリンピック」「大阪万国博覧会」などの需要によって、建設業では人手不足となっている状況がありますが、恒常的に一定規模の建設需要が見込める状態を信長は生み出していたと言えます。

今回はここまでです。次回は、信長が行った「経済改革」のなかでも重要な「金融改革」についてまとめていきます。

今回も、お読みいただき、ありがとうございました。